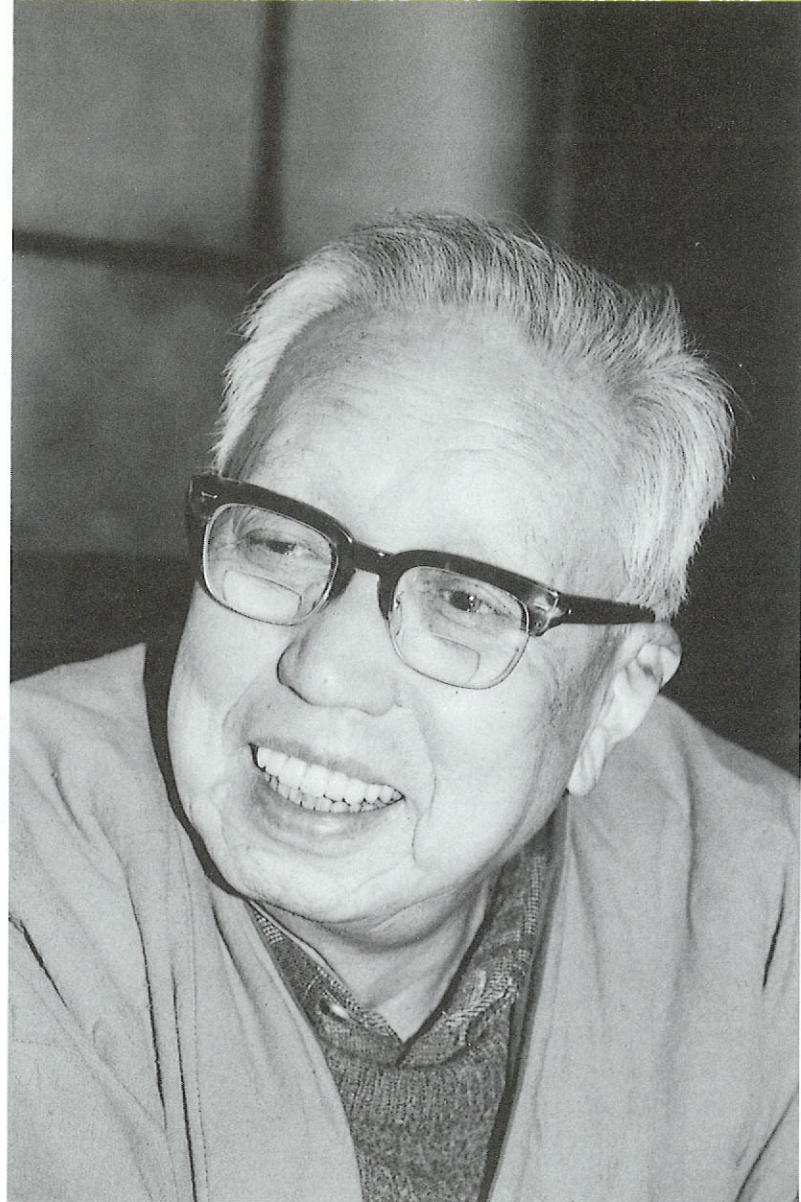


時代に沿ったものを作らなければ
技術も残していけません



肥後象眼

鉄の生地に金や銀を打ち込み、地鉄を鍛練し、日本茶で着色をした、肥後象眼。加藤清正の時代から鐔や刀剣の飾り金具に唐草、小桜など繊細な細工を施した美しい名品が作られてきた熊本の伝統手工芸です。

今回は、肥後象眼を作り続けて六十年国内で最高の水準にある現役の優れた技能者を表彰する「現代の名工」(平成二年度)に、熊本からただ一人選ばれた田邊恒雄さんに象眼に対する思いなどを伺いました。

田邊恒雄さん

明治41年、熊本市に生まれる。家は代々肥後象眼の職人で、19歳の時から正式に象眼の道に入る。戦後、象眼の用途をネクタイピンやコンバクトなどに広げる。

「平成二年度『現代の名工』に選ばれ、おめでとうございます。感想をお聞かせ下さい。」

ただびっくりしました。嬉しさを通りこして感激しましたね。戦後一時、機械を導入するかどうかで悩んだ時期もあつたんですよ。時代が合理化・効率化を求めていきましたからね。そんな時ある人から「機械工芸と手工芸は永遠に平行線で行くんです。どっちかが妥協したら両方だめになるから、手工芸はあなたが今までやってきた通りにやりなさい」と言われました。その言葉に力づけられて、迷いなんかふつとびましたよ。実際、機械で作れない部分がたくさんありますからね。弟子たちも私の考えを分かってくれて、皆、手工芸を守ってくれています。今度の賞もそれが幸いして選ばれたん

じゃないかと思えます。

制作される上で一番苦労される点はどこですか。

全ての工程で息が抜けません。だからどこが一番苦労するというのは言えないんですよ。ただ大事なことは、こうだと決めたらそれに一生懸命打ち込むことです。作品が出来上がると手放したくなくなりません。しかし、生活をしていく上では手放さざるを得ません。牛を飼っている人が子牛を売る時に涙を流す、そんな気持ちがありますよ。実は二十年あまり手放さなかった作品もあるんです。熊本県伝統工芸館に置いてありますが、五十代の時に作った物で、ずっと手元に置いていました。作品が出来上がると、「この所をこうした方がよかったな」という思いが、どうしても出てくるんですが、そういう部分がありませんでした。

「象眼をネクタイピンやコンバクトなど現代の品に生かすことを考えられたそうですね。その発想はどこから生まれたんですか。」

明治の魔刀令で鐔や刀剣の飾り金具など作れなくなって、私の祖父や父が懐中時計の鎖や帯しめを作る工夫をしてきましたからね。それを小さい頃から見て育つていかなければ、技術も残っていかないでしょう。だから常に「何か象眼を生かせるものがないか」と考えています。そうすると頭に「ぼっ」と品物ややり方が

ひらめくんです。十年ぐらい前までは、枕元にメモ紙と鉛筆を置いて、ひらめいたものを書いていました。その中から作品になったものも、いくつもあります。また、人と話している時相手の人をよく見るんです。身につけているものとかね。以前牧師さんに会った時、バッジをつけておられました。見せてもらおうと針になっていて、裏を金属で止めてある……。そこからタイタックを思いついたりしました。

「沢山のお弟子さんたちが、独立して活躍されていますね。」

十二、三人います。皆がんばっていますよ。月に一回、私の家に皆が集まって例会があるんです。若い人達と接すること、私にとってもいい刺激になります。

私は図案や品物について一言も口を挟みません。基本になる紋様の唐草・小桜・渦・古木を覚えたら、あとは思うようにやってみろ、と言います。それぞれに工夫を凝らしてなかなか面白いものを作っていますよ。私はもう弟子をとるのは無理ですが、きつと彼らが次の弟子を育て、もっと新しい分野を開拓して行ってくれらるでしょう。それを楽しみにしています。

宝石箱
(熊本県伝統工芸館蔵)

